

倫理の心を研ぎすまそう

上うえ廣榮治

明けましておめでとうございます。

正月三日は、なぜか全国的に晴天のことが多いようですが、石川啄木が次の歌を詠よんだ明治四十四年の元日も、天気は「晴れ」であったようです。

何となく 今年はいい事 あるごとし 元日の朝 晴れて風なし

このとき啄木は生まれたばかりの長男を亡くし、両親と妻は健康を害しており、そのうえ自分も体調不良で勤めていた朝日新聞社での夜勤をやめざるを得ず、借財が増えるという、三重苦、四重苦のなかになりました。それでも元日の朝の快晴に、「今年こそ、何かいいことがありそうだ」と期待し、そうであるようにと祈ったのでしょう。もちろん啄木ならずとも、元日の天気は、その年の一年を暗示しているように、できればこの歌のように、風もなく穏やかな快晴であってほしいものです。

ところで、お正月の楽しみの一つに年賀状があります。啄木も、右の歌につづいて、

正月の 四日になりて あの人の 年に一度の 葉書も来にけり

と詠んだのは、函館で尋常小学校の教員をしていたころ同僚だった女性教師から、賀状が届いたときでした。じつは、啄木が受け取ったのは葉書ではなく封書で、前年暮れに刊行された『一握の砂』^{いちあく}を彼女に贈ったお礼と、結婚したことが記されていました。

年賀状の素敵なところは、たとえ年に一度、年賀状だけのお付き合いになっていたとしても、ひと言添えられた近況に、その人の面影がしのばれて、しばし思い出に浸ることができることです。

だいぶ以前の新聞の投書欄に、二十五年たって初めて高校時代の恩師に年賀状を送ったという投稿が載っていました。

高校時代のその人は、素行が悪くクラス一の問題児で、中途退学をしたのだそうです。年賀状には、高校中退直後のことから、現在の仕事のことや、結婚して家族四人で無事に暮らしていることなどを書いたといえます。中退してすでに四半世紀、先生はもう自分のことなど忘れてしまっているだろうと思っていたところ、恩師から、社会人としてきちんと生きていることを、自分のことのように喜んでくれる、心温まる賀状が届いたというのです。

恩師に年賀状を送るきっかけとなったのは、奥さんの一言でした。彼は常々、今の自分があるのは、高校を去るときに担任の先生に言われた「人生に無価値なものはない」という言葉だと、奥さんに話していたのです。奥さんは、「そう思うなら、お礼の手紙を書いたほうがいい」と助言したのです。

当人も、できればその感謝の思いを伝えたかったのでしょう。しかし、二十五年もたって、突然改まった手紙を送るのも気恥ずかしく、そこで年賀状に積年の思いをしたためたのでした。

二十五年も前に中退した教え子からの年賀状を受け取った先生は、さぞ驚かれたことでしょう。そして

驚きはすぐに喜びに変わっていったに違いありません。高校は中退したけれど、彼にとって高校時代が、けっして「無価値」ではなかったことを物語っていたからです。

「人生に無価値なものはない」という先生の一言は、問題ばかり起こして学校を去らねばならぬことになった彼の人生を、まるごと「大肯定」してくれました。この言葉によって、彼は自分を肯定することができたのです。だから、立ち直ることができたに違いありません。

すべての物事には光の部分と陰の部分があります。一筋の陽光が風に揺れる青葉を輝かせたり、暗い闇に沈めたりするように、光と陰は移ろいます。人の言動も同じです。ときとして善意の裏に偽善がひそみ、悪を行いながら優しさを示したりします。善かれと思つてしたことが、善からぬ結果を招くこともあります。

光と陰は分かち難く、プラスがあるからマイナスもあり、「人生に無価値なものはない」ということになります。だから、光も陰も、プラスもマイナスもすべてを「大肯定」して受け容れたうえで、光の部分の前に立てて、いつそう輝かせていけばよいのです。

人間関係も同じです。人にはいろいろな側面がありますが、その全体を温かく見つめて、光の側面、善意の側面を大切にしていけばよいのです。それが人と人とがより善い関係を結んでいく秘訣です。それなのに、人の全体を見ず、悪しき一面だけを見て「大否定」するから、悪感情が増幅して、ついには争いに至るのです。

彼の高校生活も決して無価値だったのではなく、そこにプラスの要素が潜んでいたのです。それらすべてをあるがままに受け容れて、いつかマイナスをプラスにしていけばいいのだと、先生は彼を励まし、そ

つと背中を押したのでしょう。その恩師の思いをしっかりと受け止めたからこそ、彼の今があるのです。たった一枚の年賀状が、二十五年の時を経て、教師と教え子の絆を再びつなげたのです。

一枚の年賀状がもたらした人生のドラマを綴ろうというコンテストもあります。「年賀状思い出大賞」(主催〓挨拶状ドットコム、後援〓日本郵便)です。昨年の大賞作品は、およそ次のような内容でした。

「年賀状って何ですか」、こう聞いた少女は、母に捨てられ、養護施設で暮らす十六歳。病院の調理室で働いています。でも、まわりの職員は少女から見ると母親世代のおばさんばかり。暮れが近づき、年賀状の話が出たとき、少女が年賀状を知らないことに、皆は驚きました。母親と二人、住むところも転々としていたというから無理からぬことでした。職場のおばさんたちは、ひそかに、皆で少女に年賀状を出そうと決めました。仕事初めの日、「初めて年賀状をもらった。大切に額に飾ったよ」という少女の満面の笑顔に、おばさんたちも仕合わせな気分になりました。

おばさんたちのほんの小さな思いやりが、少女の一生の宝物になったのです。

二十五年目の年賀状や、年賀状を知らない少女が貰った年賀状のように、一枚の小さなはがきが人生の輝きを垣間見せることもあるのです。人生って素晴らしいと思える瞬間です。その一瞬の輝きは、情性に流れ、複雑な生き方をしていては、気付くことなく通り過ぎてしまいます。その感動に出合うためには、日々を新たに生きること、そして今を大切に生きることです。それは取りも直さず、倫理の心を研ぎすますことです。

おりしも今年は七十周年をひかえた大切な「もの前の年」です。それであればなおのこと、倫理の心を研ぎすませ、気づき即行、改革の日々を歩んでまいりましょう。